19世紀アメリカ新聞紙から見る朝鮮印象

——ベアトによる朝鮮遠征の関連写真をめぐって

陳　其　松

Uncivilizing Koreans with Visual Discourse
— Publication of Felice Beato's Korea Expedition Photos in the 19th century American Pictorials

CHEN Chi Sung

In the 19th century, Korean Peninsula has been called "Hermit Kingdom" by westerners. In 1871, Felice Beato, a famous photographer who joined America Expedition to Korea, took around 50 photos considered as the earliest pictures of Korean. These photos not only published as albums, but also in illustrated newspapers, such as Harper's Weekly and Frank Leslie's Illustrated Newspapers. However, if we compare the pictorial illustrations and the photos, it's easy to find out that these pictures were modified from the original ones. Adding new elements, adjusting structures, changing characters, these changes seemingly created different Korean "Stories" for political debates especially on the efficiency of the expedition itself.

Keyword：Korea Expedition in 1871, Harper's Weekly, Frank Leslie's Illustrated Newspaper, Western Pictorials

はじめに

19世紀は西洋において、東アジアを再認識した時代といっても過言ではなかろう。当時、東アジアの情報は、挿図によって、新興の絵入り新聞に数多く掲載されたため、それらの新聞図像が東アジアの視覚印象の定着に重要な役割を果たした。特に中国、日本の関連図像が大量に掲載された。一方、同じアジアの国とはいえ、朝鮮王朝の関連記事は稀であった。それは李氏王朝が取った「衛正斥邪」などの拒否的な対外姿勢と深く関わっており、当時、朝鮮は西洋人に「隠者の国」（Hermit Kingdom）と呼ばれていたのはそのためである。

朝鮮半島の情報が西洋新聞に大きく取り上げられるのは、中国、日本よりかなり遅れた70年代以降の

こととなる。[1] しかし、1866年のシャーマン号（General Sherman）事件と後の朝鮮遠征により、状況が大きく動いた。自国商船が朝鮮軍に焼き討ちされた事件の交渉に、アメリカが遠征軍を派遣し、朝鮮王朝に交渉を持ちかけた。しかし、朝鮮軍の徹底的な抵抗を受け、やむを得ず断念した。これは米朝間最初の軍事衝突でもあり、後に朝鮮側に「辛未洋擾」と呼ばれた事件である。遠征自体はアメリカ政府当初の目的を果たせなかったものの、現地での軍事行動を記録したフェリーチェ・ベアト（Felice Beato, 1832-1909）の写真は、当時朝鮮半島の実態を覗く重要な視覚的証拠となった。これらの写真は、早くも写真集として発売され、新聞にも掲載されたため、西洋における朝鮮についての印象（以下、朝鮮印象とする）の形成に大いに貢献した。

ただし、朝鮮についての写真の掲載状況は、各新聞紙の政治スタンスなどにより、特定の朝鮮印象をほのめかす傾向が、元写真との比較で判明できた。図像の改ざん、意識的な選別などにより、「朝鮮印象」が異なる思惑により再生産されることになる。これまでのところ、朝鮮遠征についての写真の史料的な価値には疑義がないものの、これらの写真を原点として西洋社会に派生的に広がった「朝鮮イメージ」の生産と伝播については、まだまだ検討の余地が残されていると思われる。本稿では、当時アメリカの大手絵入り新聞、Harper's Weekly と *Frank Leslie's Illustrated Newpaper* に掲載された朝鮮遠征の関連図像を検証し、図像の生成と伝播をめぐる政治的、社会的な一連の視覚的なメカニズムを解明していきたい。

1.「隠者の国」へ――写真家ベアトと朝鮮遠征

1866年、アメリカ商船ジェネラル・シャーマン号（General Sherman）が朝鮮軍に焼き討ちされた事件をきっかけにして、アメリカはアジア艦隊を派遣し、朝鮮に外交交渉を持ちかけた。司令官ジョン・ロジャース（John Rodgers, 1812-1882）とフレドリック・ロー（Frederick Low, 1828-1894）により率いられたアメリカ遠征艦隊は五隻編成であった。旗艦コロラド（Colorado）のほか、アラスカ（Alaska）、ベニシア（Benicia）、砲艦パロス（Palos）とモノカシー（Monocacy）を装備し、約1230名の人員を搭載していた。[3] 1871年５月８日に上海から出港し、長崎、横浜を経て、朝鮮半島の西海岸に到着したのは、およそ一週間後のことであった。事件の究明と通商交渉を目的とした遠征隊が、強硬な姿勢で朝鮮側に交渉を求めたが応じられず、やがて武力衝突にまで発展した。戦いは最初ア

【図１】フェリーチェ・ベアト[2]

１） 一例を挙げると、*Harper's Weekly* の場合、1857年から1888年の間、中国関連図像は250点以上、日本関連図像は60点以上あるのに対し、朝鮮関連図像はわずか10数点しかない。80年代以降、徐々に朝鮮の関連記事が増加したが、19世紀を渡り、基本的に中国と日本に西洋社会の関心が集まったことが窺える。

２）Old Japan Picture Library より

３）R. J. Swartout. (1976). Cultural conflict and gunboat diplomacy: the development of the 1871 Korean-American incident. *Journal of social sciences and humanities : bulletin of the Korean Research Center* (43), p154

メリカ軍の優勢で展開し、江華島の要塞など軍事的要所を占領できたが、ソウルへの進軍が阻まれ、結局、当初目的とした交渉がなされずに引き揚げた。軍事的、外交的観点から見れば、今回の遠征は決して成功したとはいえないものの、同行していたフェリーチェ・ベアトという写真家の存在で、東西交渉史に１ページを刻むことになる重要な事件となった。

ベアトは、写真家として、特に日本における写真術の普及において、多大な功績を残した人物として名が知られる。少年期の経歴については不明な点が多いものの、彼は当時、イギリス領となったコルフ島の出身であるため、国籍はイギリスとなっている。ベアトを写真の世界に導いたのは、義兄弟のジェームズ・ロバートソン（James Robertson, 1813-1888）である。[4] 1855年、報道写真家のフェントン（Roger Fenton, 1819-1869）の代わりにロバートソンがクリミア戦争の撮影を担当した際、ベアトは助手として同行したという。[5] さらに、1857年インドのセポイの乱や1860年の第二次アヘン戦争の時の写真撮影にも関った。そして中国において、イギリスの大手絵入り新聞、*The Illustrated London News*（*ILN*）に派遣されたチャールズ・ワーグマン（Charles Wirgman, 1832-1891）[6] と親交を重ねるようになり、後に日本で共同で起業した。

新たなビジネスチャンスを求め、1863年にベアトが日本に来た。当時横浜に駐在していたワーグマンと連名でスタジオ（Beato and Wirgman, Artists and Photographers）を設立し、1869年まで写真や新聞の販促事業を共同で行った。[8] 当時ワーグマンが横浜で発行した絵入り風刺新聞ジャパン・パンチ（*Japan Punch*）には、しばしば「カウント」（Count）という、ベアトをモデルとしたキャラクターを登場させることで、二人の親交が窺える。（【図２】）そして、４ヵ国連合艦隊による下関砲撃事件の時は、ベアトも彼と同行し、艦隊の様子や風景などを写真に収めた。しかし、

【図２】「韓国から帰ったカウントのあるべき姿」[7]

4）John Clark, John Fraser, Colin Osman（2001）, ‘A revised chronology of Felice（Felix）Beato（1825/34?-1908?）’, “Japanese exchange in art, 1850s-1930s”, p89

5）斉藤多喜夫（2006）、「横浜写真小史再論」、横浜開港資料館　編　『F・ベアト写真集２－外国人カメラマンが撮った幕末日本』所収、東京：明石書店、110頁

6）ワーグマンはイギリス大手の絵入り新聞、*The Illustrated London News*（*ILN*）の外国特派員として知られている。中国、日本などに派遣され、現地でのスケッチを数多く残した。その経験を活かし、横浜で風刺絵入り新聞、ジャパン・パンチ（*Japan Punch*）を創刊した。ベアトとは第二次アヘン戦争の時、ホープ・グラン将軍の軍隊に随行した時に知り合い、生涯の友となった。

7）チャールズ・ワーグマン（1975）、『復刻版　ジャパン・パンチ』、東京：雄松堂、156頁

8）当時写真技術は図像のコピー手段として活用され、ワーグマンのスケッチの撮影もかなりあるようである。一方ベアトもワーグマンを通じて、*ILN*に記事の挿絵の底本となる写真を提供していた。ただし、*ILN*に掲載された日本関連図像の一部は、ベアトの写真によるにも拘わらず、「我が社の特派員」としか記していない場合が多く、ベアト自身が名前を出したことは少ない。

1866年の横浜大火災で彼らのスタジオが焼失し、ネガだけが辛うじて救出されたという。[9] それをきっかけに、1870年代以降、ベアトは不動産業、貿易業、洋銀相場、米相場などの投資に積極的に参入し、実業家の一面を見せた。しかし、これらの投資もすべてうまく行かず、やがて1884年に日本を離れることとなった。それは彼が横浜上陸以来、21年目のことであった。[10]

ベアトの遠征参加は、いくつかの要因によって促されたといえる。まず、従軍記者として築いた名声や人脈に負うところが大きい。前述のワーグマンとの親交もそうであるし、キャプテン、ジョンス・ペリー（S. H. Jones-Parry）が、アメリカ、インド、日本という３つの「最も離れた」土地でベアトと出会ったことを不思議だと回想したことがある。[11] ベアトが最前線で積み重ねた実績と経歴は、当時の駐日大使デロング（C. E. DeLong）にも注目され、ベアトの作品は「世界にも君にもかなり有益になるであろう」といわれ、朝鮮遠征の指揮官ロジャースの同行を勧められたこともある。[12]

デロングの提案は遠征隊にとってはむしろ好都合であった。プロのカメラマンの同行は、遠征の宣伝にもなるし、自身の奮戦ぶりの証拠にもなる。しかもロジャースは、実は日本開国を成功させたペリー提督の娘婿である。さらにロジャースの父親、ジェームズ・ロジャース（James Rodgers）は、ペリーが北アフリカ艦隊に仕えた時期の直属の長官であり、若きペリーを抜擢した知遇の恩人でもあるため、両家族は公私ともに親密な関係を持っている。ペリーから助言をもらい、その日本経験をロジャースが意識的に継承しようとしても不思議ではない。[13] ペリーの遠征報告に日本の挿絵が載せられたように、ロジャース帰国後にグランド大統領に提出された報告書にも「大判の写真集」が含まれていたことから、[14] 視覚資料による宣伝効果が期待されていたのであろう。

一方、朝鮮遠征に参加できることは、ベアトにとって市場開拓の好機でもあった。前述にも記したように、彼が様々な事業に乗り出す際に、写真販売は重要な資金源となっている。[15] 中国、インドでの経験を踏まえて、朝鮮という未知なる被写体に潜んだビジネスチャンスを、ベアトは見過すわけには行かなかった。なお、横浜に来航した外国人旅行者の国別内訳の変化も重要な背景である。当時、イギリスでは海外の軍事費削減などの改革が行われたため、船員、旅行者などのおよそ三割ほどが減少した[16]。それに対しアメリカでは、内戦の収束により、開放された戦力を海外に投入しようとする時期であった。このような市場の変化に答えられるのは、アメリカ軍による遠征の写真集に他ならない。実はこの写真集の出版に関して、５月29日の *North China Daily News* では既に言及がなされていた。つまり、アメリカ軍がまだ朝鮮に到着していない中に、すでに販促が行われたということになる。上記に見られるよう

9）斉藤多喜夫（2006）、「横浜写真小史再论」、114页

10）東京都写真美術館（2012）、『J・ポール・ゲティ美術館コレクション　フェリーチェ・ベアトの東洋』、東京：東京都写真美術館、18頁

11）Jones-Parry 1881, vol. 2：25

12）C. E. DeLong letter to Rear-Admiral Rodgers, 26 April 1871, in Chang 2003: para. 20

13）G. H. Chang.（2003）. Whose “Barbarism”? Whose “Treachery”? Race and Civilization in the Unknown United States—Korea War of 1871. The Journal of American History（89）, para. 21

14）‘The Corean Photographs’, *Frank Leslie's Illustrated Newpaper*, 1871.9.16

15）Terry Bennett（1997, 2009）, “Korea: Caught in Time”, Reading: Garnet Publishing, p6

16）McCausland（1869-70）: preface para. 2

に、ベアトの遠征参加は、彼自身の商売戦略がアメリカ軍の宣伝のニーズとうまく合致した、一種の互恵関係により、初めて実現したと言えるであろう。

ベアト一行が遠征隊と合流したのは５月16日である。[17] 助手のウーレット（H. Woollet）[18]、それに留吉、寅吉という二人の日本人とともに横浜から乗船し、約一ヶ月、遠征隊に同行した。ベアトの現地行動に関して、残念ながら詳しい記録が見当たらないが、船員たちの手紙などにはベアトが熱心に撮影の準備や船員たちとの交流を行ったという仕事ぶりが残されている。そして、本人の回想によると、当時はコロディオン湿板写真術という最新の技法を使っていたらしい。室外での露出時間はわずか２秒で、従来より大幅に撮影時間を短縮できた一方、露光後に速やかに現像することが必要だったようである。だが野外での撮影は、やはり安定的な仕事場を確保するなどの困難があったため、かなり苦労したという。[19] この一ヶ月の間に、彼らは約50枚ほどの写真を撮影した。アメリカ兵士、艦隊の勇姿、朝鮮人の長老や役人、激戦後の戦場など、様々な現地風景が初めてカメラのレンズに収められた。

アメリカ艦隊が朝鮮半島を離れたのは６月下旬である。ベアトが上海に到着したのは６月28日であり、そして間もなく朝鮮写真集が上海で発売された。[20] ７月１日の *North China Daily News* に早くもベアトの写真集の紹介記事が掲載されている。アメリカ本土でもこの写真集は注目された。７月22日の *New York Times* に彼の朝鮮写真に関する評論が掲載されたほか、[21] 大手の絵入り新聞 *Harper's Weekly* や *Frank Leslie's Illustrated News* にもベアトの写真を転写した挿絵が紹介され、また、８月１日の *Far East Magazine* にも「ベアトとウーレットが撮影した写真」に関する記述がある。[22] このように、写真集の発売や記事報道により、ベアトが見た朝鮮半島の風物が西洋社会にはじめて紹介され、多くの人々に「隠者の国」への好奇心が掻き立てられた。

２．絵入り新聞と朝鮮印象

2.1　アメリカ絵入り新聞について

ここで、少々紙面を割って19世紀のアメリカ新聞業界と写真掲載のプロセスなどについて紹介したい。イギリスよりやや遅れるが、アメリカでは1850年代から絵入り新聞ブームが始まった。1851年に *Gleason's Pictorial*[23]、1855年に *Frank Leslie's Weekly* などの新聞が刊行され、挿絵入りの新聞形式が広くしかも

17）Chang.（2003）．p1341

18）米国籍。1867年サンフランシスコ――横浜の汽船航路が開通されてから大量のアメリカ人旅行者が来日した。Far East の記事に朝鮮写真は「ベアトとウーレット二人の写真家によるもの」と記述されるため、現地での仕事は二人で行ったと考えられる。またウーレットの人脈もベアトの遠征随行を後押ししたと言われる。

19）『フェリーチェ・ベアトの東洋』、東京：東京都写真美術館、20-21頁

20）John Clark, John Fraser, Colin Osman（2001），p101

21）『フェリーチェ・ベアトの東洋』、東京：東京都写真美術館、18頁

22）『フェリーチェ・ベアトの東洋』、東京：東京都写真美術館、63頁

23）*ILN* の影響を受けたアメリカ早期の絵入り新聞の一つ。フレデリック・グリーソン（Frederick Gleason, 1817-1896）とマチューリン・マリー・バロウ（Maturin Murray Ballou, 1820-1895）が共同創立。1855年バロウが新聞の所有権を買収し、*Ballou's Pictorial* と改名させた。

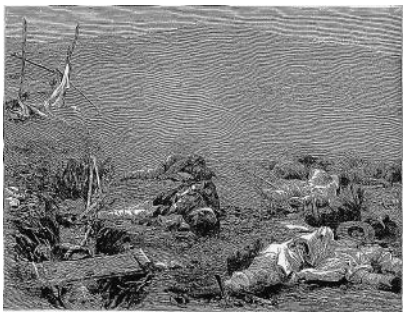
急速に受け入れられた。本文で取り上げるのは、ニューヨークで発行された最大手絵入り新聞 *Frank Leslie's Illustrated Newpaper* と *Harper's Weekly* の二紙である。創業者のフランク・レスリー（Frank Leslie, 1821 – 1880）はイギリス人で、本名はヘンリー・カーター（Henry Carter）と言い、アメリカに渡航する前に、*ILN* の製版者を務めたことがあったという。1848年渡米後、ボストンの *Gleason's Pictorial*、ニューヨークの *Illustrated News* で務めたが、やがて独立して、1855年に *Frank Leslie's Illustrated Newpaper* を創刊した。*Harper's Weekly* の創業者、ジェームス・ハーパー（James Harper, 1795–1869）とジョン・ハーパー（John Harper, 1797–1875）である。[24] そして、1850年に *Harper's New Monthly Magazine* という絵入り月刊誌を出版し、1857年、週刊紙の *Harper's Weekly* の発刊とともに、本格的に絵入り新聞業界に参入した。南北戦争の時、二紙とも従軍記者を前線に派遣し、大量の戦地の挿絵を掲載した。特に *Harper's Weekly* は、エイブラハム・リンカン（Abraham Lincoln, 1809–1865）が率いた北軍への熱狂的な声援のため、一時的に宣伝情報誌のような性格を持った。内戦終結の後、トーマス・ナスト（Thomas Nast, 1840–1902）などの有名挿絵画家を起用し、世相を切る風刺漫画で庶民層の人気を博し、社会的な影響力をさらに拡大した。[25] 一方、*Frank Leslie's Illustrated Newspaper* は、先行者として大量の購読者を抱えた人気紙であり、*Harper's Weekly* にライバル視される存在であった。

ここで特筆したいのは、新聞における図像掲載の仕組みである。写真の大量転写技術が1890年代までには実用化されていなかったため、図像を掲載する際、絵師により一度挿絵に描き下ろしてから印刷するのが一般的であった。しかし、挿絵に転写された際に、場合によって、人為的に修正されたり、いわゆる「レタッチ」される場合が度々見受けられる。そもそも19世紀において、他紙からの図像を無断転載したり、都合により修正したりする事例は珍しくなかった。朝鮮遠征の関連記事にも、実は似たような現象が見られる。例えば1871年９月９日の *Harper's Weekly* に掲載された「M'Kee要塞の中」（【図３】）という図像は、実は同じ地点で撮った２つの写真を繋ぎあわせたものである。（【図４】【図５】）また、９月９日の *Frank Leslie's Illustrated Newspaper* に掲載された朝鮮人の図像（【図６】）に彼が持った *Every Saturday* という新聞紙のタイトルが自社のものにすり替えられた事象も確認できる（【図７】）[26]。結局、新聞記事において、写実的な「写真」と創作的な「挿絵」の境界線は実は曖昧である。図像という視覚媒体が直観的であるほど、その信憑性に注意を払う必要があると思われる。一方、これらの人為的な操作痕跡を読み解くことにより、当時アメリカ社会におけるアジア意識及びそれと連動した政治世論、文化意識に遡れると考えられる。新聞挿絵でも写真でも、19世紀西洋社会における意識形成の視覚的な「機器」である。朝鮮印象はこれらのメカニズムによって構成、再構成され、ようやく「新聞図像」という形に固定された。ただし、その表象の裏には、「文明」と「野蛮」などの諸言説の拮抗が潜められている。

24）J. & J. Harper と名乗る小さな事務所であるが、1833年に Harper & Brothers と改名され、現在の Harper-Collins 出版社の前身である。

25）1871年ニューヨークの政閥、ウイリアム・M・ツイード（William M. Tweed, 1823–1878）が汚職で起訴された事件で、庶民層に訴え続けたナストの風刺漫画の働きが大きいと言われている。

26）Terry Bennett（1997, 2009）, "Korea: Caught in Time", p27



【図３】「M'Kee 要塞の中」[27)]

【図４】ベアトが撮った M'Kee 要塞の写真－1[28)]

【図５】ベアトが撮った M'Kee 要塞の写真－2[29)]

【図６】ベアトが撮影した朝鮮兵士の写真

【図７】『はじめてコロラドに乗船した朝鮮兵士』[30)]

27）'The Corean War'，*Harper's Weekly*, 1871.9.9

28）Terry Bennett（1997, 2009），"Korea: Caught in Time"，p35

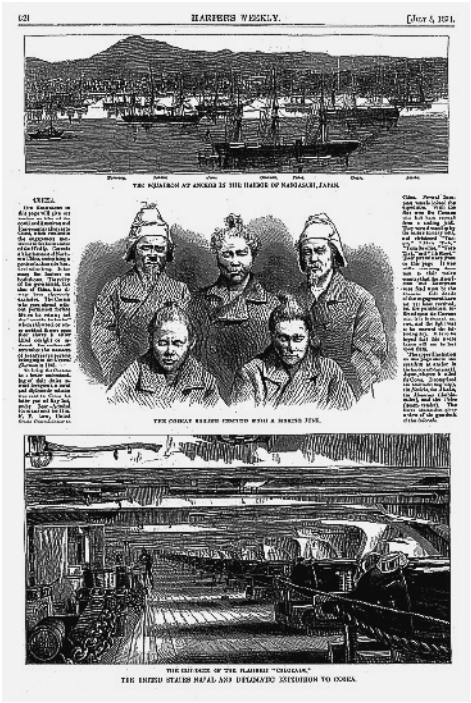
29）Terry Bennett（1997, 2009），"Korea: Caught in Time"，p34

30）'The Chastisement of Corea'，*Frank Leslie's Illustrated Newpaper*, 1871.9.9

2.2 謳歌された「勝利」

当初の目的が達成されなかったものの、莫大な軍事費を投じられたことで、国内の批判の声が必至であるが、アメリカのメディアでは最初は遠征隊の「勝利帰還」を中心に報道され、世間を騒がせた。[31] 例えば、当時７万の購読者を擁した*New York Times*でも、最初の段階では遠征賛成のスタンスが取られていた。すなわち、もし相手が条約締結の和平行為に戦争で挑発した「野蛮的、卑劣的、好戦的」な朝鮮人なら、我が国の軍事行動は他の文明国のためにもなるという。[32]

大統領選挙の時からグラントを擁護した*Harper's Weekly*も一貫して親政府的な報道スタンスを取っていた。そして、1871年７月８日、*Harper's Weekly*に「Corea」という記事を一面で掲載した（【図８】）。そこに長崎に停泊していた艦隊の様子とコロラド号の砲塔甲板の風景を描く２枚の図像が掲載されたほか、５人の朝鮮漂流民の肖像が紙面の真ん中に配置されている（【図９】）。この記事においては、まず1866年のシャーマン号の事件や朝鮮半島の鎖国政策などについて紹介されている。朝鮮において、自国民の出国は無論、外国人との接触も厳禁されている。今回の遠征はあくまでこの５人の漂流民を朝鮮に送還するという人道的な目的であり、これをもって朝鮮に「外国人に対する果たすべき責任を知らせる」のである。しかし、我々の善意に対し、朝鮮側の対応は「文明」的とは言いがたい。朝鮮半島でアメリカ軍が攻撃を受けたため、漂流民達が帰国しても境遇は憂慮すべきであろう。



【図８】「朝鮮」[33]

【図９】「遭難したジャンク船から救助された朝鮮水手」[34]

この記事では漂流民送還という大義名分で遠征の正当性を唱えようとする同紙の立場が明らかである。ただし、この５人の「漂流民」が、果たして実在する人物であるかどうかは疑問である。【図９】を改めてみると、背景が省略されているのに

31）Gordon H. Chang, 'Whose Barbarism? Whose Treachery? Race and Civilization in the Unknown United States-Korea War of 1871', "The Journal of American History", 2003, para. 9

32）'Trouble at the Corea', *New York Times*, 1871.6.17

33）'Corea', *Harper's Weekly*, 1871.7.8

34）'Corea', *Harper's Weekly*, 1871.7.8

対し、この５人の顔はかなり鮮明かつ写実的に描かれている。記事の説明によると、この５人は船員に制服を着せられた上、洗礼も受けてキリスト教に改宗したと記述されている。[35] しかし、もしこの５人の送還が遠征の目的だとしたら、朝鮮側との交渉において、アメリカ側が彼らのことに言及しなかった点は極めて不自然である。真実はともかく、この５人の肖像を掲載することにより、*Harper's Weekly* が主張した「人道的」な目的がより一層説得力があるように見える。西洋の物事を無差別に拒否する上、罪もない自国民にも非情な刑罰を科する朝鮮政府は、まさに後進的で非文明的であるという姿が、*Harper's Weekly* の記事により描かれている。

そして、同紙９月９日の「朝鮮戦争」（The Corean War）という記事も遠征を賞賛する口調であった。記事の冒頭では、遠征の目的は「将来朝鮮半島付近で遭難した我が国の漂流民の安全を保証する条約」を締結するという大義名分を強調し、軍隊の派遣は「朝鮮の野蛮人」（corean barbarians）から大使たちを守るための必要措置であると述べている。そして、アメリカ軍は朝鮮側の許可を得た上で、川の測量作業の最中に朝鮮軍の伏撃を受けたと主張し、つまり開戦の責任は朝鮮軍にあると訴えた。我軍の行動は、ただ「卑劣」な朝鮮官員たちを「目を醒ませる」ためであるという。そして、記事は司令官ロジャースの記述を引用しながら、戦いの一部始終を詳しく紹介し、M' Kee 少尉の尊い犠牲が如何にアメリカ軍を勝利へ導いたかを情熱的に記した。[36] 記事の最後に、旗艦コロラドに上船した朝鮮人たちの行動も記された。

> 「彼らはたちまち散らばり、壺や空き瓶、応急食、*Harper's Weekly* など、未開社会の人間にとっては摩訶不思議なものをなんでも懐に入れようとする」[37]

この記述にも、朝鮮人の後進性をアピールしつつ、アメリカ側による武力行使の正当性を強調するスタンスが読み取れる。

同記事に５枚の図像も掲載された。前述の「M' Kee 要塞の中」（【図３】）のほか、「旗艦コロラドで開かれた軍事会議」（【図12】）、「朝鮮使節が搭乗した朝鮮ジャンク」（【図13】）、「モノカシー要塞」（【図20】）などがある。そのうち、M'Kee 大尉の肖像（【図11】）以外の４枚は、「遠征に同行した公式カメラマン、Sr. F ベアト氏が現地で撮った写真より翻刻された」[38] と記されている。しかし、これらの図像にも、アメリカと朝鮮を「文明」と「未開」の対極構造に組み込ませようようとする文化的な仕掛けを思わせる。ベアトが撮影した50枚ほどの写真の中に、使節や、村の長者、捕虜など朝鮮人の肖像が数多くあったにも拘わらず、Harper's Weekly の記事においては、戦場の死体や遠くから見たジャンク船の船員など、顔がはっきりと確認できないものしか選ばれなかった。それにより、朝鮮人の人間性が最小限に抑えられ、戦争の残虐さを薄めることができた。それと対照的に、戦死した M'Kee 大尉の肖像が大き

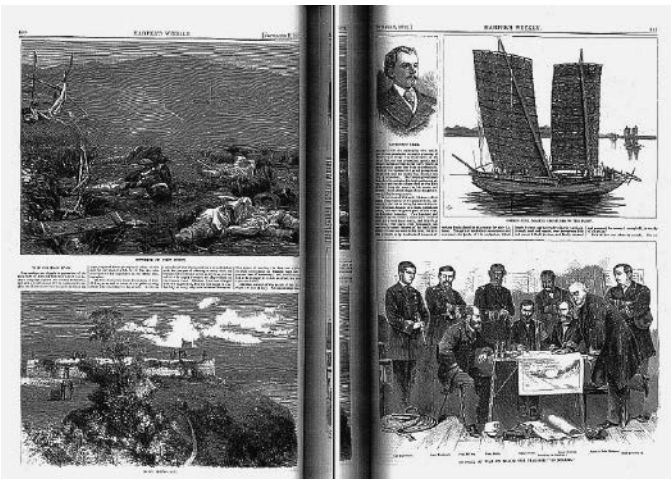
35）この五人が授けられた名前は「Tar-pot」、「Main Tack」、「Tom Bowline」、「Fore Tack」、「Jib Sheet」となり、すべては船の各部位の呼称である。

36）'The Corean War', *Harper's Weekly*, 1871.9.9

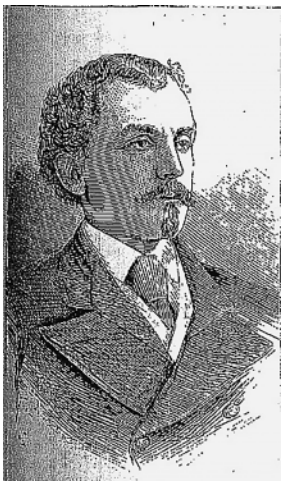
37）'The Corean War', *Harper's Weekly*, 1871.9.9

38）'The Corean War', *Harper's Weekly*, 1871.9.9

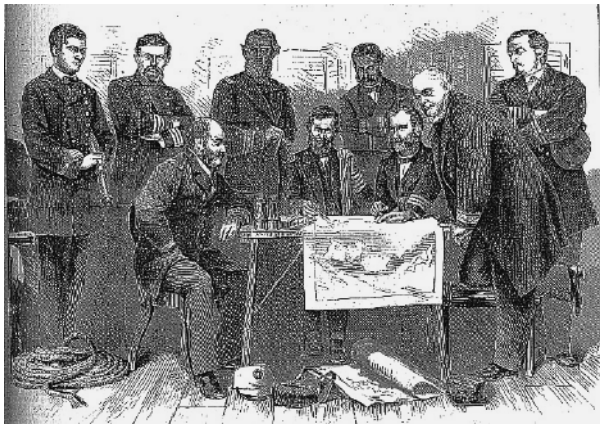
く出され、彼の犠牲を強調した。これで、卑劣かつ野蛮な朝鮮人と、命まで犠牲を払って人道的な価値と国家の名誉を守ろうとしたアメリカ将官はまさに立派であったというシナリオである。



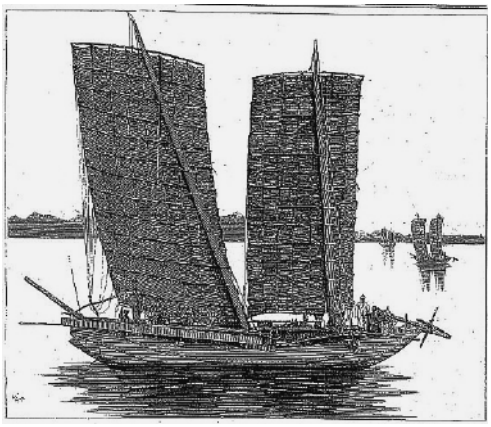
【図10】「韓国戦争」[39]



【図11】「M'Kee 少尉」[40]



【図12】「旗艦「コロラド」で開かれた作戦会議」[41]



【図13】「朝鮮使節が搭乗した朝鮮ジャンク」[42]

2.3　遠征への批判

遠征直後の世論は賛成派のほうが主流であったが、遠征の出費と成果が見合わない結果となり、米朝関係を逆に悪化させるなどの批判が徐々に現れる。例えば日本で教鞭を執った東洋学者のグリフィス（William Elliot Griffis, 1843-1928）が、1883年の回想録にこの遠征を率直に「失敗」と表現した。[43] ブラウン（Robert Brown）は「ロジャースは大量の弾薬を朝鮮に打ち込んだから向こうも反撃するしかな

39）'The Corean War', *Harper's Weekly*, 1871.9.9
40）'The Corean War', *Harper's Weekly*, 1871.9.9
41）'The Corean War', *Harper's Weekly*, 1871.9.9
42）'The Corean War', *Harper's Weekly*, 1871.9.9
43）Griffis 1883: 571

い」と砲艦外交の強硬姿勢を批判し、[44] また、上海総領事を務めたジョージ・スワード（George Frederick Seward, 1840-1910）も武力行使の慎重論者であった。

> シャーマン号事件の処理と通商協定は、私から見ると、難しい目標ではない。ただし適当な武力展示は条約締結には必要であると考える…だが、私が言ったのは武力の「展示」であり、行使ではない。場合によって使ってもいいというニュアンスは毛頭ない。[45]

最初は賞賛の文面を綴った*New York Times*も、約二ヶ月後に「朝鮮にて私達が２つの政策の間で躓き、満足も栄誉も得ずに撤退した」と反省の色を示した。[46] 1871年７月17日の*New York Tribune*は、朝鮮に戦争を仕掛ける正当性をも問い詰められた。

> もしかしたら［大勢朝鮮の死傷者たちこそが］我が大使が思った『文明化』の対価かもしれない.....我々が朝鮮の領海で主張しようとする権利はどこにあろうか？この人達を殺すことで何か得ようとするのか。この暴走の外交政策はまたどれほどの命を犠牲にし、私達をどこに連れていくのであろう。戦争を始めることはどれほど戦争を終わらせることより容易であるかに気がついたら、上記の質問はもっと興味深くなるのであろう。[47]

上記のような遠征懐疑派の意見は、*Frank Lesile's Illustrated Newspaper*の図像記事にも表された。９月９日の「朝鮮への懲罰」（The Chastisement of Corea）において、今回の遠征とそのきっかけとなったシャーマン号事件の詳細が掲載された。この記事に、シャーマン号の船員たちと朝鮮の官員たちとの交渉が詳しく説明され、船員達の「攻撃的、非理性的」な言葉に冷静に対応した朝鮮官員の姿が描かれた。そしてシャーマン号への攻撃は、あくまで船員達の略奪行為への抵抗であり、*Harper's Weekly*の記事に見られる「野蛮」な朝鮮印象とは真逆である。そして、指揮官が測量船への攻撃を「［国］旗への侮辱」として捉え、積極的な交渉を拒否したから武装衝突まで発展したという。記事の終わりにこの遠征は、数百人の朝鮮人を殺した上、外交交渉の任務も失敗となり、この「海外で行う醜くかつ高い戦争ごっこ」の必要性を非難した。[48]

９月９日と９月16日、二週間連続*Frank Lesile's Illustrated Newspaper*の報道記事に大量の朝鮮図像が掲載された。その中、朝鮮人の肖像が多数採用された上、キャプションで詳しく映された人たちの身分と行動も紹介された。交渉に応じた官員達、戦で負傷した捕虜、村の村長など、「人間」としての朝鮮人の顔が率直に読者に示されている（【図14】から【図18】）。これはまさに*Harper's Weekly*が、朝鮮人

44）"The Countries of the World", Brown 1876-81, vol. 5: 66

45）'The Corean Difficulty', *New York Times*, 1871.8.7

46）Robert Swartout, Jr., 'Cultural Conflict and Gunboat Diplomacy: The Development of the 1871 Korean-American Incident', *Journal of Social Sciences Humanities*（Seoul）no. 43., 1976, p162

47）'Civilizing the Coreans', *New York Tribune*, 1871.7.17

48）'The Chastisement of Corea', *Leslie's Illustrated Newspaper*, 1871.9.9

の人間性を思わせない傾向とは真っ向対決のような報道姿勢とも言えるであろう。また、両紙とも船室内での作戦会議の写真を掲載したが、*Harper's Weekly* は西洋人のみの作戦会議（【図12】）を掲載したのに対し、*Frank Lesile's Illustrated Newspaper* はロジャース、ローと二人の通訳の写真（【図19】）を採用した。ここで注目すべきなのは、【図19】の中に見られる二人の東洋人通訳は、中国風の格好をしているにも拘わらず、「ジャンク船で来た朝鮮の官員との対談、コロラドにて、通訳を介した」という不正確なキャプションが付けられた。この「勘違い」が意識的かどうかを断言するのは困難であるが、ベアトの写真集に彼自身が入れたキャプションが付いていることを考えると、単なる情報不足での判断ミスとはやや考えにくい。しかし、この付け加えた情報により、図像の意味合いが大きく変化した。元々アメリカ側の船内会議を写すこの図像は、朝鮮の使者たちが、アメリカ側の対談に応じた歴史的な一シーンとなった。このキャプション一つだけで、この図像に朝鮮人が不在にも拘わらず、理性的な「朝鮮像」が創りだされた。しかも、主流メディアが煽りたてた野蛮的、非人間的な朝鮮印象とまったく逆的であり、平和的で、文明国アメリカとの交渉に堂々と臨んだ朝鮮像となっている。*Harper's Weekly* が掲載した「旗艦「コロラド」で開かれた作戦会議」（【図12】）を再び振り返ってみると、この２つの図像に朝鮮人が同じように登場していないのに、特定の朝鮮印象が醸し出されている。「作戦会議」において、朝鮮人の「不在」は、彼らの敵性を前提とした。それに対し、【図19】が描かれた朝鮮人の「架空的な存在」は、前述の朝鮮野蛮説とは対照的である。この両紙による朝鮮図像の掲載は、結局、単なる現地の情報提供だけではなく、それぞれ「朝鮮」という客体の文明・野蛮性を代弁しようとしている。

【図14】[49)]

【図15】[50)]

【図16】[51)]

49）'The Chastisement of Corea', *Frank Leslie's Illustrated Newpaper*, 1871.9.9

50）'The Chastisement of Corea', *Frank Leslie's Illustrated Newpaper*, 1871.9.9

51）'The Chastisement of Corea', *Frank Leslie's Illustrated Newpaper*, 1871.9.9

【図17】[52]

【図18】[53]

【図19】[54]

2.4　空想の旗で語る「名誉」と「文明」

遠征する側の「文明性」を演出するには、非人道的な、野蛮な朝鮮人の存在が必要不可欠である。しかし、世論を動かすには、その野蛮な朝鮮人を国内の一般民衆との接点・衝突点を作らなければならない。朝鮮遠征と関わる論陣の数々を検証してきて、遠征の正当性を主張する意見の多くは、「国家の名誉」に言及していることが明らかとなった。特にロジャース自身が報告書の中で、朝鮮人の挑発行為は「旗への侮辱」、つまり国家の名誉への損害が彼の軍事行動を後押ししたという視点が、遠征直後に様々な新聞紙に転載され、一時に主流となる観点となった。グラント大統領自身も1871年12月の演説で、遠征隊の勇敢なる行動は「犯罪者達を処罰し、［国］旗の尊厳を守りきった」と賞賛し、[55] さらに、ロジャースの功績と生涯を描く「神速」（God Speed）という詩の中で、朝鮮遠征を描写する一節の中にも「われわれの栄誉に従われ」（‘Twas ours the glory to obey’）という一句がある。つまり朝鮮での戦闘はあくまで国家の尊厳を守るために取った措置であるという賛成派の論理であり、遠征隊による攻撃と殺傷は、すべて「国家の尊厳」という大義名分により正当化された。

この世論傾向を最も象徴的に表したのは1871年９月９日の *Harper's Weekly* が掲載した「モノカシー要塞」（【図20】）である。図面に、遠方から眺める視角で、占領後のモノカシー要塞が収められた。城壁の上に、数名の兵士がアメリカ国旗を揚げようとしている。これはまさにアメリカ軍の勝利を物語るドラマチックな一枚である。しかしながら、このシーンは、実は *Harper's Weekly* の創作であることが、ベアトの写真と対照すれば明らかとなる。挿絵の構図は写真とかなり相似しているが、兵士たちの位置とスケールは明らかに元の写真と相違する（【図21】）。しかも、写真には城壁の上に兵士の姿が多数確認できるが、国旗らしきものはまったく見当たらない（【図22】【図23】）。つまり、兵士たちが旗を揚げているシーンは、意図的に修正された結果であり、全く同紙の空想である。おそらくHarper's Weeklyは、この象徴的な場面を通じ、読者たちの愛国心を煽り、遠征批判の声に対抗する狙いを保持していたのであろう。この実在しないアメリカ国旗が、図像により具現化され、アメリカ国民と朝鮮人との対照的な

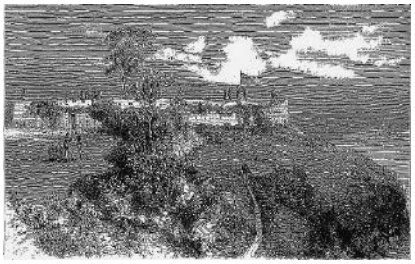
52）‘The Corean Photographs’, *Frank Leslie's Illustrated Newpaper*, 1871.9.16

53）‘The Corean Photographs’, *Frank Leslie's Illustrated Newpaper*, 1871.9.16

54）‘The Corean Photographs’, *Frank Leslie's Illustrated Newpaper*, 1871.9.16

55）U.S. State Department, Foreign Relations of the United States, 1871（Washington, DC: Government Printing Officc, 1875）, vi.

立場で結びつく「接点」として機能したと思われる。



【図20】「モノカシー要塞」[56)]

【図21】「城壁に立っている兵士たち」[57)]

【図22】「モノカシー要塞」（部分）[58)]

【図23】「城壁に立っている兵士たち」（部分）[59)]

小結

本文は、1871年の朝鮮遠征を例に上げて、異文化に対する視覚的印象が、如何に政治的、文化的などの多重のメカニズムにより生産、再生産されたかを、アメリカの大手絵入り新聞の記事報道により考察した。1871年の朝鮮遠征は、外交的な失敗に終ったとはいえ、間違いなく東西交渉史、形象史において重要な「事件」である。多才な写真家ベアトが撮った現地の写真をきっかけに、この「隠者の国」が、はじめて西洋における東アジアの視覚印象に加わることとなった。一方、1840年代から、「挿絵」という視覚的な表現手法を取り入れた西洋の絵入り新聞の繁盛ぶりは、従来とは異なった東アジア情報の流通ルートを西洋社会に提供できた。近代最初の朝鮮印象が、このように当時最先端の視覚メディアにより世間の目を引き寄せたのである。しかし、アメリカ社会において、朝鮮遠征に対する賛否の拮抗で様々な波紋が起きて、西洋新聞紙に初めて出現した朝鮮印象も、論争の渦のなかで、絶えずその姿を変えていた。朝鮮図像の新聞掲載は、朝鮮

56）‘The Corean War’, *Harper's Weekly*, 1871.9.9

57）Terry Bennett（1997, 2009）, “Korea: Caught in Time”, p33

58）‘The Corean War’, *Harper's Weekly*, 1871.9.9

59）Terry Bennett（1997, 2009）, “Korea: Caught in Time”, p33

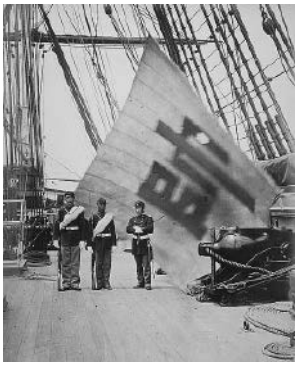
半島の風物、人物を紹介する一面があるものの、遠征の賛否論争から切り離せなかった末、「図像」自体が言説の「戦場」にもなった。

実際に掲載された朝鮮の新聞図像と写真を照合してみると、図面内容やキャプションに様々な修正や手が加えられ、元の写真とは異なる朝鮮印象が創出されたことが分かる。*Harper's Weekly* は、一貫して遠征賛成論の立場で論陣を張った代表的な新聞である。同紙は記事や図像で遠征の正当性と朝鮮人の野蛮さ、未開さを唱えつつ、さらに元の写真には見当たらないドラマチックな要素を掲載した図像を付け加えたことにより、「アメリカ」対「朝鮮」＝「文明」対「野蛮」という文化的図式を作り出そうとした。つまり、*Harper's Weekly* に掲載された朝鮮遠征の関連図像は、もはや単なる情報を伝達する視覚媒体ではない。掲載写真の選定から内容の編集までの一連のプロセスにより、新たな政治性が付与された一枚一枚の図像は、アメリカ軍の勝利を物語った視覚的な言説に加担することとなり、アメリカ中心のイデオロギーを裏付ける文化的「装置」に転化させられたと言っても過言ではなかろう。それに対し、*Leslie's Illustrated Newspaper* は、記事内容も政府の遠征と外交的失敗を問い詰める内容を多く記している。朝鮮人の肖像を積極的に取り入れたり、キャプションによる説明で、文明の西洋国家と対話する能力を有する朝鮮人のイメージを読者にアピールし、敢えてはやりの朝鮮野蛮論に抗って、朝鮮人の人間性を前面に押し出すという報道戦略を取っていた。ただし、視角が違うとはいえ、二紙とも図像の意図的な解釈や修正を通じ、特定の朝鮮印象を作り出そうとする傾向が見受けられる。文明にせよ、野蛮にせよ、実は各新聞紙の遠征に対する姿勢への賛否に関わる意見から派生した「虚像」にすぎないかもしれない。

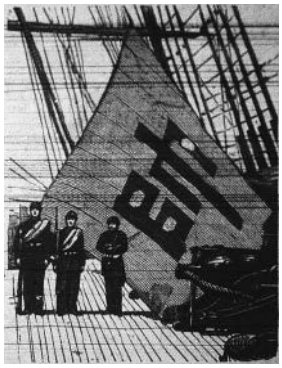
だが、ベアトが撮った元の写真のほうが、朝鮮民族の「実像」に近いかというとそうでもない。写真でも、挿絵でも、時間を空間にして「瞬間」を具現化する技術である。ただし、その「瞬間」は、あくまで作られたものであることを意識しなければならない。19世紀の写真は、明るい室外でもシャッタースピード２秒で切ることができると考えると、大抵の写真は人為的な「瞬間」しか撮影できないことが分かる。例えば（【図26】）は、二人の兵士が戦場の後ろから現れる瞬間の写真に見えるが、実は彼らはポーズを取ってシャッターを切るまで待機していたと考えられる。そうでないと、（【図24】）の背景の旗がブレるように、鮮明な影像にはならないはずである。挿絵の場合ならさらに自由度が高く、（【図24】）に転写された時、旗の動きさえも止めさせ、「的確」な瞬間を演出することができる（【図25】）。さらにベアトが、気に入った構図にするため、時に被写体となる戦死者の位置を移動させたりしている[60] ことを考えると、結局、写真でも、新聞図像でも、消費者を意識した「芸術作品」でしかないかもしれない。本文で取り上げた朝鮮の視覚印象は、まさにこうした様々な視覚的メカニズムによって、多重的に表現・再表現されている。

上記のように、本論文は、西洋新聞を通じて、東アジア印象の生成を検討する学術領域の重要性と可能性を示唆しつつ、アメリカの絵入り新聞に掲載された朝鮮図像の検証を通じ、新聞図像の情報媒体としての多面性を再確認する一方、新聞図像が言説の「場」として、19世紀東アジア印象の生成や定着において力を発揮した影響を検討した。

60）Chang, 2003, p1354



【図24】ベアトによる写真（旗に注目）



【図25】新聞挿絵（旗に注目）

【図26】ベアトによる写真（兵士に注目）